



第42回「おかねの作文」コンクール

母の未来予想図～ありがとうお母さん～

鹿児島県・薩摩川内市立川内南中学校 3年 高田 知和

この家に越してきて10年。母は住宅ローンの見直しをするらしく、古い書類を整理している。「ねえ、お母さんの未来予想図、見せてあげようか」と手渡された淡いピンクの袋。中からは『生活夢プラン』と書いた冊子と古めかしい茶封筒が出てきた。茶封筒には日本銀行の文字。そして「平成10年8月20日」と母のメモも残っている。つつましく過ごす我が家にはおよそ縁遠いお役所からの書類。中から出てきたのは45年後までの家族全員の生活診断表だった。

父が脳出血で倒れたのは13年前。私がまだ1歳半の時だった。左半身にマヒの残った父と小学校にあがったばかりの姉、そして3歳の兄、私を連れ、母が今日まで必死で生きる姿を私はずっと間近で見てきた。専業主婦だった母が職に就いた。障害を持った父が生活しやすいようにとバリアフリーの家を建てた。ちょうど10年前のことだ。その頃母の参加していたボランティアサークルで貯蓄についての学びがあり、この生活診断を申し込んだのだそうだ。この診断書が母にとっては、生活の指針であり、未来予想図として、苦しい時も母を支えてくれていたのだ。

病院への支払い、家のローン、生活費。大学生となった姉と高校へ通う兄の学費のある中、私たち3人共何不自由なく、習い事もさせてくれた。「あたり前」と思っていたこの生活が、「ミラクルな生活」なのではと気づきはじめたのは中学に入ってからのことだ。どう考えても我が家の家計に余裕があるはずがない。しかし生活していけているのが、不思議でならなかった。もちろん、日頃の母は「ド」がつくくらいの儉約家。お風呂の残り湯を洗たくやトイレにまで使う。電気はコンセントからぬいてまわるのだ。テレビやパソコンのコンセントがぬいてあった時には「またか」とうんざりするが、母は「地球にもやさしく、お財布にもありがたいエコ活動にご協力を」と笑顔で素通りしていく。そんな母の財布は学用品を買う時だけは大いにゆるむのである。もちろん姉が私立大学の薬学部へ進みたいと言った時もそうだった。「予定では4年制大学のはずだったんだけど……。そう、がんばりなさい。あなたの夢がかなうようにみんなでがんばろうね」

の一言だけで、姉は6年間大学に通うことを許された。

この資料の中で母が一番目を通したのは私たち3人の教育資金であることはその手あかと折り目を見れば明らかだった。3人共に中、高そして私立4年制大学の授業料まで見通して計画してあった。当時3歳の私も私立文系4年制大学。結婚は26歳で結婚費用まで200万円ずつ準備とある。「お母さん、こんなに貯金してるの」とたずねると、母は笑顔で「まさか。これは『これだけ必要ですよ』という目安だからね。でもね、あなたたちに学びたいだけ学ばせてあげたいと思って、がんばってきたわ。あなたたちが立派な大人として社会に貢献できる人になるのだけを楽しみにしているのよ」とさらっと言い放った。

「お母さん、お母さん、そんなに軽々しく言わないでよ。それってお母さんの未来予想図じゃないじゃん。私たち子どものための予想図でしょう。私たちのために、10年も前からこの紙も、自分の体もボロボロになるくらい毎日、毎日……。」コンピューターで印字されている字が涙でぼやけ、大切な未来予想図を不覚にも私はぬらしてしまった。

「あら、どうかしたの」と母は何も気づかなかったように、また書類の整理をはじめていた。「住宅ローンを借り替えたら、お姉ちゃんの1年分の授業料がひねり出せるかも」と計算機も持ち出してきた。

私は母の未来予想図をおどけたチャップリンの絵のついたピンクの袋の中にそっと入れた。言葉では表せなかったが、母への感謝の気持ちをたくさん込めて……。

「人生に必要なものは勇気と想像力、そして少々のおかねだ。」チャップリンの絵の横にはこんな言葉が添えてあった。私の人生には少々のおかねだけでなく、深い愛情まで準備されている。後は私自身が勇気と想像力をつけなければ。

いつか私も生活設計を立てる日がくるだろう。その時にはもちろん年とった父母の老後資金が最優先だ。母が私にしてくれたように。ムダをはぶき、大切だと思うことに有効におかねを使うことを教えてくれた母のように私もそんな日は、はやく訪れるようにまずは、私自身の未来予想図を頭の中で描いてみる。「お母さん、私、公立の高校・大学にいけるように、勉強するね。」計算機を握りしめたままふり返った母の笑顔がまぶしかった。

